

〔新入社員の声〕

初めての養豚研修で見た世界

辻 実 菜

(伊藤忠飼料株式会社 研究所 予防衛生チーム)

All about SWINE 67, 26

今年の春に入社し、社会人としても獣医師としてもまだまだ未熟ではありますが、このような雑誌に寄稿する貴重な機会をいただきましたので、入社後の研究所研修や配属後の業務について、振り返りながら書かせていただきます。

学生時代、私の通っていた大学には牛・豚・鶏の附属農場があり、生体を学べる環境は整っていました。しかし、新型コロナウイルスの影響で実習がオンラインになったり、実習時間が大幅に短縮されたりと、思うように経験を積めない状況が続きました。また、私は薬剤耐性菌を扱う研究室に所属しており、豚農場にはサンプリングのために立ち入る程度でしたので、入社時点では生きた豚にじかに触れた経験はほとんどありませんでした。

入社後は、まず各畜種に関する座学の講義を受け、その後1カ月間、弊社研究所の農場で豚の飼養管理を学びました。最初の頃は「豚に歯でかまれたら、牛どころではない大けがをするのでは…」と心配になったり、成豚（特に種雄豚）の大きさに圧倒されて、なるべく近づかないようにしていたことを思い出します。

それでも、繁殖から分娩、育成、出荷まで一通りの作業に関わる中で、自分が管理に携わった豚たちが日々成長していく姿を目の当たりにし、1カ月が経つ頃には豚舎から離れるのが名残惜しく

なるほど、豚に対して親しみと愛着を感じるようになっていました。

研修中は驚くことの連続でした。餌の配合や飼槽への給餌作業、子豚の体重測定、出荷作業など、いずれも想像以上に体力と筋力が必要であること。また、朝農場に来たら子豚が脱走しており、その賢さに驚かされたこともありました。基本的にはおとなしい豚たちですが、移動時にずんずん前へ進むような活発な個体もあり、品種によって性格がまったく異なる点にも興味を引かれました。豚の管理といっても、育成や繁殖だけでなく、糞尿処理や環境・衛生管理まで多岐にわたり、養豚の奥深さを実感する研修となりました。

6月からは予防衛生チームに配属され、現在は検査業務を担当しています。配属後は生きた豚と直接関わったことはなく、主に死亡豚の病理解剖を通じて業務にあたっています。教科書で見たような病変を実際に目にしたときには、感動に近い気持ちになることもあります。農場や豚の状態をもとに原因を推察し、どのような検査が必要かを判断するためには、日々の学びが欠かせません。

検査業務にも徐々に慣れてきた今、現場についてもっと深く知りたいという気持ちが強くなりました。数年後には、農場巡回に一人で赴いた際に的確な衛生指導ができるよう、これからも日々学び続けていきたいと思っています。